

らく
楽

読

らく
楽

書

第23号

平成26年4月発行

精華町立図書館

所在地：〒619-0285 京都府相楽郡精華町大字南稲八妻小字北尻 70 番地

電話：0774-95-1911 FAX：0774-95-3976

HP：<http://library.town.seika.kyoto.jp>

おすすめの本

しょうしょうしげもと

『少将滋幹の母』

谷崎 潤一郎 新潮社 / F ㊦

谷崎潤一郎が、平安時代の古典『今昔物語』に材をとった作品。

八十歳近い大納言の北の方が美人だという噂を聞きつけた、時の権力者藤原時平。当代一の色男で、その北の方とも関係を持っていた平中から、大納言夫妻の夫婦仲などを聞き出した時平は、大納言が自分のために開いた宴で、北の方を贈り物として差し出させることに成功します。正気に返った大納言は、失った北の方への妄執を断ち切れぬまま死んでしまいます。

残された息子・滋幹も幼いころに見た母の面影や匂いを胸に秘め、成人してもなお、母への思慕を膨らませていきます。

平中の三枚目風な好色話や滋幹の母を恋しく思う気持ちは、千年のときを経た今もまったく色を失いません。流れるような美しい文体で作り上げられた絵巻物。この芸術の海に溺れて、誰かを烈しく、あるいは切なく思い慕う気持ちにとらわれてしまうかもしれません。

「右大臣実朝」(『惜別』に収録)

太宰 治 新潮社 / F ㊦

武士の世の体制を築き上げた源頼朝亡き後、鎌倉幕府では暗殺や謀反など暗い出来事が続きます。暗殺された将軍、優れた歌人といったイメージのある三代将軍源実朝。太宰治は「アカルサハ、ホロビノ姿デアロウカ」と実朝に言わせました。『吾妻鏡』の原文を随所に入れながら、朗らかで風流を愛した青年に忍び寄るものを太宰らしく描いています。近習の目を通して語られるので読みやすく、実朝を近くに感じられます。

滅びの予感、芸術への愛。実朝と太宰の人生の交錯。文壇にその名を馳せ、そして人生を十分苦しんだ太宰が理想としたのは、若くして滅ぶことを予感しながら、平然と雅の道を歩む実朝の姿でした。ホロビル前のアカルサを実朝の上に映した、太宰の秀作を存分にご堪能ください。

魯迅を材に中国人との友情を描いたこの本の表題作、『惜別』もまたお薦めです。